

棚田学会通信

第16号 2005年6月30日

発行/棚田学会

〒184-8577

東京都小金井市本町6-5-3

(ふるさときやらばん内)

TEL:042-381-6721

FAX:042-383-8614



宮崎県日南市坂元棚田

【巻頭言】 全国棚田(千枚田)サミット日南市開催に向けて

宮崎県日南市長 谷口 義幸

日南市は今年、郷土が生んだ明治の外交官小村寿太郎侯の生誕 150 年、又、ポーツマス条約締結 100 周年、さらにエメラルドグリーンに輝く日南海岸が国定公園に指定され 50 周年を迎えるなど歴史的な節目の年を迎えたところです。是非、近くにお出での際は日南市の歴史や文化にふれて頂くと幸いに思います。

さて、平成 18 年の全国棚田(千枚田)サミットの開催地として決定して頂いた坂元棚田についてご紹介いたします。

坂元棚田は、日南市の最高峰である小松山(989m)の麓に位置し、昭和 3 年から 10 年まで 7 年の歳

【目次】

巻頭言 全国棚田(千枚田)サミット日南市開催に向けて 宮崎県日南市長 谷口 義幸…1

各地の情報 紀伊長島町の災害復旧業務に携ってー水土里ネットみえ 総務部 指導情報課 小林 敏弘…2

平成 16 年度の台風災害を振り返って 豊後大野市緒方支所 建設課 高山 友徳…3

愛媛県内の 2004 年豪雨、台風による農地・農業用施設の被害について 愛媛大学農学部 櫻井 雄二…4

日本の棚田百選の紹介 椹平の棚田 山形県朝日町 産業振興課 伊藤 雅樹…5

会員通信 中国雲南省元陽の棚田を訪れて 筑波大学大学院 経営・政策科学研究科 寺田 憲治…6

田染荘の棚田現地見学 九州大学 服部 英雄…7

官庁ニュース 新潟県中越地震で被災した棚田及び農村集落の再生に向けた取組

農林水産省 農村振興局 防災課 災害対策室 小林 賢一…8

事務局ニュース 石井進記念棚田学会賞選考委員会報告・平成 17 年度棚田学会大会のお知らせ…9・10

月をかけて開墾され、棚田のまわりには当市の特産である飮肥杉が優しく棚田を包み込んでおります。長方形（1枚あたり5畝）に区画された田んぼは階段状に整然と並び近代的なイメージを持っていますが、その石積みは石を大小に割り、試行錯誤を繰り返して積み上げた人々の苦勞が感じられる温かみを持った棚田です。

ところが近年、坂元地区は過疎と高齢化が進み、耕作放棄地や荒れ地が見られるようになりました。このため、国の事業を導入した棚田の整備を契機に、棚田という地域資源を保全しようという地区住民の気運が高まり、保全の取り組みはもちろん、春にはレンゲ、秋には曼珠沙華（彼岸花）で棚田を彩り、訪れる人々が楽しんでいただく取り組みがなされております。また、担い手解消策として都市住民のボランティアによる田植えや稲刈り、石垣清掃の農作業支援活動を企画し、このことが結果として、農業や棚田保全の理解につながり、平成14年度からの棚田オーナー制度の導入へと展開が広がってまいりました。

現在、オーナー制度には29組の方々が参加され、年間3回の農作業や収穫物の送付の他に、自然や農家と接する機会を多く取り入れ「農の素晴らしさ」と「農家の知恵」を伝えることにも重点をおいて活動しており好評を得ております。

このような棚田保全と集落の活性化に掛ける地区住民の熱い「思い」に応えるとともに、先人の築いた文化を未来へ伝承するため、日南市としても棚田サミットの誘致をさせて頂いたところ です。

そういえば以前、食の形態は豊食→飽食→呆食そして現在は崩食の時代へと移り変わったとのコメントがありました。BSE・偽装表示・残留農薬・日本食離れと様々な問題が取り上げられ、まさに食の崩壊の時代であると痛感しておりまして、日本人が日本固有の大切な自然、文化までも失われつつあるのではと危惧しております。

現在の農業は生産者と消費者で支えております。崩食の時代となり「食」に対する両者の接点が希薄となった今だからこそ、私は「食」の再構築に向かって食料・農業・農村を消費者とともに考える交流の場として「坂元棚田」を位置づけ、将来にわたり棚田を守る活動を支援していきたいと考えております。

そのために棚田に思いを寄せる人々が一堂に会し、保全の意義や必要性を多様な視点から捉え話し合う全国棚田サミットを当地

で開催できることを光榮に思っております。坂元棚田は、歴代の全国棚田サミット開催地からすると、規模が小さいですが「山椒は小粒でもピリリと・・・」というような意義深いサミット開催ができるよう今から準備を進めてまいりますので、ぜひ、全国の皆さん、今年の愛知県鳳来町に続き、来年の宮崎県日南市のサミットに多数お出でくださるようお願いいたします。

[各地の情報]

紀伊長島町の災害復旧業務に携って

水土里ネットみえ 総務部指導情報課

小林 敏弘

昨年の6月～10月にかけて、台風が10個も本土に上陸して、さらにその台風による前線の影響により局地的な大雨をもたらし、各地に被害が多々発生した。

特に三重県においては、9月28日～29日の台風21号の影響による秋雨前線の活発な動きにより、29日には1時間に130mmを超える猛烈な雨（尾鷲市、宮川村）が降った。本会（水土里ネットみえ）の事務所がある津市内でもアツという間に道路側溝から泥水が氾濫し、幹線道路は河川のようになり、さらにあらゆる公共交通機関がストップし、津駅では途方に暮れる学生やサラリーマンで溢れていた。本会職員も雨が小康状態になった時を見計らい、排水機場等の施設を管理する職員を除き、同方面から通勤している者同士が公用車にそれぞれ分乗し、帰路についた。途中、農地は一面茶色の海で、幹線道路も一部冠水し、多数の車が立ち往生していた。そのため住宅内の狭幅な道路を進みつつ、通常の3倍以上の時間を要して、自宅にたどり着いた感じであった。自宅のライフラインもかろうじて大丈夫であったが、もう少し雨が降れば・・・と思うとゾッとするものであった。テレビやラジオでは四六時中台風（洪水）情報を流し、大雨による被害の深刻さを痛感した。翌30日は前日までの天気がウソのように晴れ、公共交通機関もJRの部分的な不通区間を除き、ほぼ平常どおり運転していた。しかし、テレビや新聞では県内のあらゆる所で災害が発生し、特に宮川村の災害については全国版のニュースで紹介されていた。

数日後、紀伊長島町より災害が甚大であり、応援してほしいとの要請があったが、新聞等で隣接の宮川村の記事ばかりで、楽観的な気分で町へ向かった。

しかし、現地へ到着すると我々の想像を絶するものであった。町の職員に同行し、被災地向う途中、道路沿いには大きな岩や山林の崩壊による原木（スギ、ヒノキ）が横たわり、土砂の堆積があちらこちらに見られ、被害の大きさを物語っていた。被災地は、山に囲まれた地域でその中央を河川が縦断しており、猫の額ほどのわずかな農地であるため、河川を氾濫した濁流により農道の法面が崩壊したり、農地は部分的な流失や土砂堆積があり、見るも無惨であった。

被災状況



被災地域は、町の唯一ほ場整備された地域で、椎茸や梅の生産地として有名であるが、その農業振興地域が壊滅状態に陥っていた。町としても土砂で埋まった農地や崩壊した水路の復旧には多大な時間と労力を有するが、上述したとおり町の唯一の農業振興地域であり、農業に対して意欲的であるため翌年度に稲の作付けができるように努めたいとのことであった。

本会の職員も会員である町からの緊急を要する支援要請に対して、各人が日常業務を行いつつ、全員が時間調整し、国の査定に向けて業務に勤しんだ。津市にある事務所から現地へ向かうにも片道一時間半以上もかかり、時間を有効に使うため、早朝に事務所を出発し、日が暮れるまで必要な調査等を行い、帰所後その調査をもとに深夜まで査定に必要な書類の作成に努めた。査定日が決まっており、時間に余裕のない状況で地元負担を軽減させることを念頭に置いて事業費を積算しているため、ピリピリした雰囲気なかで業務が進んでいった。

しかし、地域は基盤整備済であるが、高齢者が多く、この機会に農地の耕作放棄地が進み、農家の経営基盤が弱ってくるのではないかと町では懸念していたが、地元から復旧への強い要望があり、こちらとしてもやり甲斐があった。

結局、査定率が92%と高率となり、町としても満足な査定でこちらも達成感でいっぱいであった。

国の事業では、自然災害で被災した農地や施設の復旧を支援する事業で現状復旧が基本であるが、農村・農家の実情や地域に応じた環境や景観に配慮するなどして画一的なものではなく、復旧工法に対して柔軟な対応を展開し、農業に対しての振興に努めることも考える時にきているのではないかと。

平成16年度の台風災害を振り返って

豊後大野市緒方支所建設課 高山 友徳

豊後大野市緒方町（旧大野郡緒方町）は大分県の南西部に位置しており、南北に縦長の形をしています。南側にそびえる祖母、傾山系に囲まれ、盆地を形成し中心部には緒方平野や棚田百選に選ばれた軸丸棚田などがあります。また大野川水系緒方川より水利の供給を受けている農業用水路は町内全域に整備され昔から米どころとして知られています。緒方米をはじめ、さといもやなす、きれいな水から作られる地酒は全国でも有名です。また、観光面においても日本の滝百選の原尻の滝や4月にはその周辺でチューリップフェスタ等が開催され毎年大勢の観光客で賑わいを見せています。

このように、農業が中心の我が街ですが昨年は8月末の台風16号に始まり、18号、23号と三度にわたる台風の襲来を受け近年にない大災害に見舞われました。特に台風16号においては降り始めからの雨量が多いところで500ミリを超え、さらに6時間連続で時間雨量20ミリ以上を観測するなど、耕地や公共施設に甚大な被害をもたらしました。この三度の台風による被害件数は耕地災害だけでおよそ600箇所、被害額は5億8千万円にものぼりました。ただ、この状況で負傷者が出なかったことは不幸中の幸いであったと思っております。

大分県内でも緒方町は災害が多発する地域と言われています。山地の方では棚田が多くしかも田と田の高低差が大きく、高いところで10メートル近くあるうえに土質が砂質系であるため崩壊が起こりやすい地形なのです。そのうえひとたび災害が発生すれば棚田であるゆえ2枚目3枚目と連続して崩壊しており農家への負担はかなりのものになります。

近年の災害を見てみると共通していることがあります。それは稲作を行わない転作田

や自己保全管理田に被害が集中していることです。特に緒方町では高齢化が進み、また減反政策等も重なり転作田や自己保全管理田が増えつつあります。その結果水管理を怠ってしまい災害に遭うケースが大半を占めるようになりました。復旧については、ここ数年災害が発生したにも拘わらず金銭面や後継者不足を理由に復旧を断念する方が増えているのも実情であり、とてもさみしく感じています。同じような問題を抱えている自治体も多いのではないかと思います。この後継者問題については全力で取り組み若者の定住促進を図る必要があると考えます。その一環として緒方町では都会から農業へ転向する新規就農者を対象とした住宅を建設し、地元の農業従事者に指導を受けながら農業に携わっていくといったことを実施しています。今後はこのような取り組みがとても重要であり、行政にも求められるものと思っています。



最後に災害の担当になって7年、本当に昨年は全国的に災害の多い1年でした。新潟県をはじめ災害に見舞われた方々に心からお見舞い申し上げます。我が街もほとんどの復旧工事を終え田植えもほぼ終わり田んぼには一面の緑が広がっています。今年の秋こそは昨年のような災害に見舞われることなくこの小さな苗が大きく育つように、また災害によって尊い命が失われることが無いようお願いしております。

愛媛県内の2004年豪雨、台風による 農地・農業用施設の被害について

愛媛大学農学部 櫻井 雄二

2004年の豪雨、台風は、5月から10月の半年間に11回、愛媛県に多大の被害をもたらした。農地・農業用施設にも被害を及ぼし、その被害箇所数は3,339箇所と、2002年(1回、16箇所)、2003年(7回、136箇所)に

比較し非常に多かった。この箇所数の多さと被害の甚大さは、この年の豪雨、台風が場所的・時間的に集中した雨をもたらしたことに起因すると考えられる。その被害の実態を愛媛県農地整備課が集計したデータに基づき整理する。

2004年の豪雨、台風による被害は、県下62市町村中57市町村で何らかの被害を受けたことで示されるように、ほぼ県下全域で発生した。被害を受けた市町村の多くは、愛媛県の類型区分で中間ならびに山間農業地域である。一方、都市的地域(6市町村)、平地農業地域(5市町村)でも被害を受けたが、それらの市町村には後述の写真-3、4に示すような中山間域が存在し、その様な場所で被害が生じていることが伺える。

被害対象毎の割合では、田(30%)と畑(14%)をあわせた農地は1,485箇所、44%を占める。ため池(5%)、頭首工(4%)及び水路(16%)をあわせた水利施設は832箇所、25%を占め、道路は1,003箇所(30%)であった。

これらの被災箇所は、法律に基づき国からの補助(補助率は被害程度などにより異なる)を受け復旧工事がなされる。今回、その申請数は被災箇所に対して農地で40%、施設で57%であり、それらは数箇所を除き認められているが、被災箇所に対して約半分、農地では半分以上が放置されることになる。法律では、例えば異常な天然現象(降雨では最大24時間雨量が80mm以上、又は、最大時間雨量が20mm以上)の下での被害で、1箇所の工事費が40万円以上が認定対象となる。さらに、この認定には事業内容についていくつかの条件が付いている。例えば、傾斜が20°を超える農地や有効幅員が1.2m未満の農業用道路などは経済効果が小であるとして除外される。また農地については受益者負担があり、後継者のない人の農地などが辞退されることが生じる。このように災害復旧がなされない中山間部の農地は、災害を受けることによって放棄される状況を呈する。

次に、被害の状況を示す。



写真-1 水田畦畔の崩壊

【日本の棚田百選】

榎平の棚田

山形県朝日町産業振興課 伊藤 雅樹

榎平（くぬぎだいら）の棚田がある朝日町は、山形県の中央部に位置し、磐梯朝日国立公園の主峰、大朝日岳の東部山麓地域、能中地区にあります。

現在の榎平は、約14ヘクタール、208枚の水田が扇状に広がっています。東側眼下100mには最上川が悠々と流れています。北側にはひめさゆりの群生地で見られる一本松公園があります。



写真-2 樹園地の流出崩壊

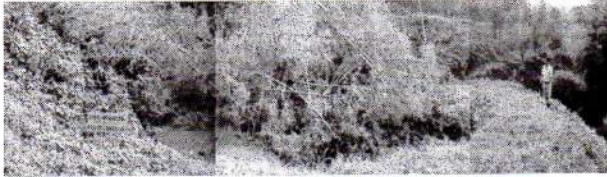


写真-3 ため池上流の崩壊と池内埋没



写真-4 ため池堤体外法面の崩壊



写真-5 水路の崩壊



写真-6 道路山留め壁の崩壊



ここ榎平の開発計画は、今から百数十年前の江戸時代末期まで遡ります。延長約8kmに及ぶ灌漑用水路の工事に着手しましたが、工事は困難をきわめました。完成までもう一歩という所までこぎつけながら、数カ所の地すべり地帯に阻まれ、未完成のまま断念されました。この堰跡は、「幻の源次兵衛堰」として現在に語り継がれています。

その後この地は、水利が悪いため池を利用するのが精一杯であることから、一部の水田を除き大部分は桑畑として管理されてきました。

再びこの地を開田しようと計画されたのは、戦時中の食糧難に伴い、国で食糧増産の国策が執られたためです。問題だった水利は、隣の集落である八ツ沼地区の奥を流れる油子沢から取水し、何箇所もの隧道を経て榎平に導水することにより解決され、ようやく棚田を完成させました。

今では、朝日町エコミュージアムサテライトのひとつとして位置付けられています。地元住民が中心になり、一本松公園の山一面にひめさゆりを植栽したり、山一面の草刈りをしたりと公園の整備が進み、大型バスで棚田を見に訪れる方も年々増えています。ビュースポットとなっている一本松公園から見下ろす榎平の棚田は、まさに絶景です。

しかし、いざ棚田に踏み込んでみると、基

★

盤整備などが成されていないため、水路や道路が全ての水田にあるわけではなく、軽トラックも入れない状況です。用水路は素掘りで、掛け流し方式のため、管理にかなりの時間を費やすこととなります。それに加えて、水田面積の約3割もある畦畔の草刈りという重労働までおまけとして付いてきます。

見る側と見られる側。見られて嬉しい反面、近年の中山間地域に共通の課題である「農業従事者の高齢化」「農業後継者不足」など、ここにも例外なくあてはまり、どのようにして水田を守っていくか悩んでいました。

とはいっても、このまま放って置く訳にも行かず、地域住民と行政が各々の役割を見だし、一緒になって課題を解決するため、昨年「棚田保全ワークショップ」を開催しました。

合計3回のワークショップ（地区内全戸参加）と県全域を対象とした発表会の開催、そのための打合せを何度となく繰り返しました。棚田のことや集落のことについて、みんなて話し合いを続けました。

その話し合いの中で、参加者全員に共通していたのは椹平の景観の素晴らしさでした。椹平の棚田は、近くの一本松公園から見下ろす風景から、四季ごとの美しさをより感じる事ができ、その良さを大切にしていこうということでもまとまったのです。それには、将来もずっと水田として守っていかなければなりません。

中には、ここ数年で作付け出来なくなると予想される水田もあります。これを地元で調整しながら、守っていかなければならないという気持ちになって来ました。

軽トラックも入れない農道や、あるかないか解らない素掘りの水路については、自力でも直していくというような耕作者たちの意気込みも生まれて来ました。

行政に頼り切っているだけでは解決できないこと、行政にしか出来ないことや、行政と地域が一緒になって実行しないとうまくいかないことなどが、このワークショップではっきりと確認できました。

これから何をどう取り組んでいくのかを整理し、『椹平の棚田保全マップ』を完成させたのです。この保全マップを基礎に、今年度より実践できることから実行に移していきます。また、椹平の棚田は、全面積が中山間地域直接支払制度の該当地になっているため、この制度を活用しながら、地域独自で整備を進めていきます。行政と地域、互いに誠意を持って、ひとつずつ実践して行くのです。そして、美しい農村の資源を守り続けようという誓い合ったのです。

昨年、国際水田・棚田フォーラムで中国の梯田（中国では「棚田」を「梯田」という）を世界遺産にと報告をされた、張宏臻さんのいる「雲南省元陽」で、5月9日から14日まで、棚田現地見学がありました。中国内で起きた反日デモのためキャンセルが出たにもかかわらず28人が参加。コーディネーターは中島峰広先生、ツアーコンダクターは写真家の青柳健二さん、参加者は理事数人を含めた豪華メンバー。農業分野にも長けた若きツアーガイドの宗東昇さんに、「棚田や畦について、今回ほど多く通訳させられた事はありません」と言わせる程熱心な視察団でした。

想像を絶する規模の梯田は田植えの時期。普段の日でも民族衣装を纏った女性たちは、長めの苗を背負い、水牛数頭を引き連れて、ゆっくりと田んぼへ向かっています。とある集落の水車小屋の中に唐箕、粉曳きの臼などがあったのにはビックリしました。下駄を鳴らしながら踊る民族舞踊にも親近感を覚え、ホテル近くの市場は毎朝人々で賑わい、様々な野草の中に日本では絶滅危惧種の「田字草」を見つけて大喜びし、納豆、味噌、豆腐など日本の食のルーツがここにあると、大発見でした。

見るものすべてに感動の5泊6日（元陽滞在は2日間のみ、前後の4日間はひたすら移動）の旅でしたが、急速に成長している中国の経済活動の中で、雲南省元陽の棚田は、誰がどのように耕し続けるのか、不安も隠せません。参加者のお一人、筑波大学大学院の寺田憲治さんに感想を寄せて頂きました。

★

中国雲南省元陽の棚田を訪れて

筑波大学大学院 経営・政策科学研究科
寺田 憲治

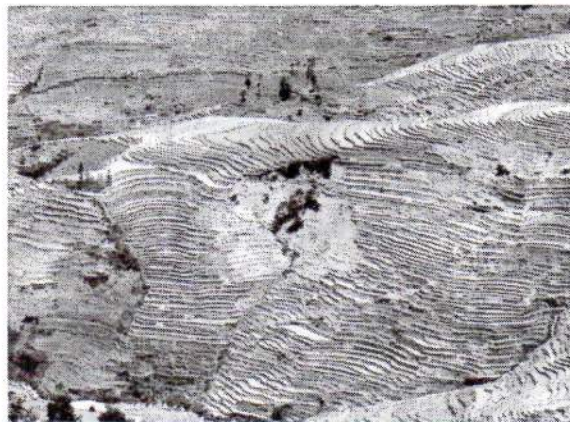
5月9日から14日にかけて棚田学会現地見学会「中国雲南省元陽の棚田」に参加しました。日本から飛行機を乗り継ぎ昆明に、そこから1日かけて車で元陽に移動し、やっとのことで拝んだ棚田はあまりにも壮大で、言葉を失ったことを憶えています。しかしよく目を凝らすと畑作に転作されている箇所、耕作放棄されている箇所、既に崩落してしまっている箇所があることに気づきました。これらの原因について考察してみようと思います。

元陽の棚田には数百年も続いている独特の資源循環システムがあります。この資源循環システムは森林、棚田、村、河流の4つの要素から成り立っており、水や有機資源などが4要素の中を循環しています。またこれらの4要素は立体的地形を形成しており、最上部に森林、その直下に村、そこから下流に棚田が位置しています。そしてその3つの要素を縦断的につなぐものが河流です。そして4要素の根幹が村です。村は人間活動を意味し、村なしには森林、棚田、河流の維持・管理は不可能であるからです。資源循環システムのうち、水循環は最上部の森林に降った雨が地下水となり、村内で生活用水、棚田で農業用水となります。そして棚田から蒸発散によって再び降雨に戻るといったものです。有機資源循環は、稲藁や草類などが家畜に与える飼料として森林や棚田から供給され、家畜は人間の食料や農作業の畜力となります。家畜の糞尿は堆肥として棚田に還元され、また乾燥燃料やバイオガスとして家庭用燃料として利用されるといったものです。

しかしこのような資源循環システムも近年不具合が発生しています。その兆候が耕作放棄箇所、崩落箇所の存在であるわけです。その根本原因は、山間地域である元陽においても市場経済化の波が押し寄せ、若者の出稼ぎや移住による村の人口流出が甚だしいことです。この現象はこれまでの資源循環システムの根幹である村の要素の衰退を意味し、全体のシステム自体が機能不全を引き起こしています。さらに地元政府は棚田を観光資源として観光開発に積極的で、元陽の棚田を世界遺産に登録しようと申請作業も行っています。しかし世界遺産登録によって、さらに元陽における市場経済化がさらに加速し、資源循環システムの維持はさらに困難なものになることが予想できます。本来世界遺産は、現存する貴重な「自然」や「文化」を人類全体の宝物として損傷、破損等の脅威から保護し、保全するための取り組みであります。その世界遺産に元陽の棚田が登録されることで、かえってその存在が危ぶまれるというのは世界遺産の本来の趣旨に反し、また絶対に避けるべきことです。

最後に元陽の棚田は、人類全体の宝物です。ゆえに我々は元陽の棚田の荒廃を外国のこととして捉えるのではなく、保全に向け積極的にかかわりを持つことが必要です。また日本は市場経済化の先達であり、市場経済下で苦しい努力をしながら棚田を保全してきた実績を有しています。その棚田保全のノウハウを中国をはじめとする全世界に伝えるこ

とが必要です。このようなノウハウを伝えることを目的とした人材交流、コミュニケーションを今後積極的に行うことが重要です。



田染荘の棚田現地見学

九州大学 服部 英雄

棚田学会の現地視察は6月18～19日、豊後高田市、宇佐市周辺で行われた。豊後高田市の田染一帯は中世荘園田染荘の所在地である。田染・小崎地区には鎌倉時代の古文書にみえる地名がいまに残り、そのことから、中世の耕地景観が復原できる。小崎地区は荘園水田を保存し、荘園領主制度（オーナー制に同じ）に取りくむ。豊後高田市は農水省の国庫補助事業である田園空間博物館事業によって、その保存事業を支援してきた。田植え行事が各地で行われるようになったが、田染小崎の場合、参加者500人（主催者発表）という大規模なものであり、大分県内では最大で、マスコミの注目もある。いっぽう同じ田染のなかでも大曲の美しかった棚田水田が放棄され畑地・荒地化している。課題は多い。

今回の現地見学会は荘園水田の保存への取り組みと、関連する田園博物館事業の理解に主眼があったと考える。企画は海老澤理事によってなされ、現地の説明には飯沼賢司会員が主としてあたった。兩名も含めて服部も領主（一口3万円）である。たまたま一週間前6月12日にお田植え祭があり、飯沼は別府大の学生50人と、服部は九大の学生70人とともに参加したばかりである。「田染の水田は日本の心を持つ人ならば、だれにとっても懐かしく、素晴らしいものです。この景観が未来の人の目に映ることをねがってやみません」。「住民の方が田を愛し、自然を愛し、それにつながる全てのものや人に思いやりを持っているように感じた。」「単に伝統を守るだけでなく、どのように工夫して伝統と、それを守る人々の生活双方を活力あるものにするかという課題」「今なお中世の面影

を残す田染という土地で、当時の人々のやり方を習い、歴史を実感した。」こんな感想を九大の学生たちはもった。

柵田学会員はお田植え祭での手植え水田を見た後、雨引神社湧き水利用の自然灌漑田や、その下の赤迫の井手がかり水田を歩きながら、中世を体感した。田園博物館の導入による排水施設（乾田化により機械の使用が容易になる）、拡幅され砂利舗装されたあぜ道（トラクターの利用が拡大）も現実である。また間歩（マブ）井手のような江戸時代の終わりに開発された灌漑施設を見た。そのうち田染耶馬のひとつ、夕日観音に上り、保存水田をみた。この景観は中世のおもかげをよく残すと石井進前会長がおっしゃった旨、紹介があった。

その後河野了氏宅で石井前会長の国東での軌跡についての報告を聞き、ひきつづき小崎公民館にて県・市行政そして地元の農家および婦人部の方々と2時間ほど、懇話会を持った。地元からは河野精一郎・荘園の里推進委員会会長はじめ多数が参加された。県西高事務所からの田園空間博物館の事業説明、また取り組みに対する市長の熱弁を聞き、そのうち参加・柵田学会員も全員発言し、水田保存への期待を語った。しかし現段階で後継者がいないことを切実に痛感した。かつて嶺崎村（小崎・横嶺）は独立した一村であった。だが今、教員・市役所勤務（民宿も経営）である2戸以外に地元で青年・若者はおらず、小崎地区の小学生は4名とのことだった。理事に文化庁・文化景観保存の関係者が3人ほどいたので、文化財保護法の改正ほか景観保存の説明も行ったが、地元には規制に消極的な雰囲気があった。

夜は「落の臺」という地元活性化のため公費を投入して作られた木の香・たたみの香も新しい施設に宿泊した。経営は隣接する富貴寺ご家族である。夕食会には市長を始め、市役所の皆さんも参加された。耕地課長は合併前（豊後高田市、真玉町、香々地町合併により新市）まで真玉町職員であった北崎さんである。この会では宇佐国東を世界遺産にする動きについても話題になった。実現の可能性があれば、田染小崎は一つの核になる。

途中手打ち蕎麦実演中であつたが、ホテルの時間に間に合わなくなるので、しばし中断してもらい、小崎に向かった。盛りを少し過ぎたようだったし、あいにく月夜だったが、ホテル乱舞は健在で、感激の声が上がった。

翌朝7時には国宝富貴寺の朝のお勤めに参加した。河野英信師の読経が国宝大堂の隅々に響き渡って、仏の里の神秘を実感した。

この日は田園空間博物館の構成要素を確認した。宇佐社境内にてこの日から参加する別府大学飯沼賢司会員と合流する。飯沼会員にはベストセラーとなった『八幡神とはなにか』『環境歴史学とはなにか』の「なにか」シリーズがある。前者はいまだにアマゾン全世界の図書売れ行き順位4万台を維持している。後者の表紙は田染荘小崎である。説明は微にいり細にいり有益であった。宇佐神宮をへて大分県歴史博物館、昼食を真玉温泉ランドで取り、いったん解散式、ついでバスは夷岩屋、天念寺（伝統文化伝習施設「鬼会の里」・阿弥陀如来展示館）、長安寺（太郎天）へとまわった。天念寺の空の架け橋（無明の橋）、そして屋山の天狗・太郎天（太郎天狗）はふるさときゃらばん「天狗のかくれ里」のイメージに重なる。田園博物館の構想の実感と、その間に展開される新旧の水田状況を確認でき、有意義な一日であった。ここでバスは空港に向かい、他の車も帰途についた。車組は途中、豊後高田市昭和のまちを見学、農業倉庫の保存活用に端を発し、偶然にヒットしたともいえる昭和の町構想が、実は田染の保存構想にも大きくリンクしているという説明を聞いた。



【官庁ニュース】

新潟県中越地震で被災した柵田及び農村集落の再生に向けた取組

農林水産省農村振興局防災課災害対策室

小林 賢一

16年10月23日17時56分に新潟県中越地方でマグニチュード(M)6.8の「新潟県中越地震」が発生し、川口町では震度7を観測しました。その後、震度6弱以上を観測する大きな余震が4回も発生するなど、活発な余震活動を伴ったことが今回の地震の特徴

であり、これら一連の地震により、新潟県中越地方を中心に、ライフライン等地域基盤に重大な被害が発生しました。農林水産業関係では、農地、農業用施設を始め、畜舎、林道、養殖池など農林水産業施設に甚大な被害が発生し、被害額は約1,300億円に上りました。

被災地では、こうした甚大な被害を被った中、復旧・復興に向けた対策に取り組んでいるところであり、地すべりなどで道路が寸断され全村避難を余儀なくされた旧山古志村（現長岡市）では17年3月に「山古志復興プラン」を策定し、平成18年9月を帰村の目標時期に設定し、中山間地域復興のモデルを目指して復旧・復興に全力を挙げているところです。

復興プランでは、復興に向けた取り組みを進めるにあたり、「山古志らしさのある美しい景観を保全・創出」していくこととし、その中で「地域を特徴づける山並みや棚田・棚池などの景観を維持」するとしています。

また、復興に向けた重点事業に掲げられた「夢を育む山古志ブランド農業の創造」では、棚田の利活用を調整する棚田活用機構（仮称）のもと、営農意欲が高い農家への利用集積や、新規就農者・都市住民による棚田の積極的な活用などを図ることにより棚田を保全し、美しい景観と豊かな環境を守っていくこととしています。



山腹崩壊により大きな被災を受けた棚田



山の斜面が崩れて原型をとどめていない棚田

農村振興局では、これらの動きを踏まえて、旧山古志村を始め新潟県中越地震により集落全体が甚大な被害を被った中山間地域に

ついて、その復旧・復興の支援策を新潟県と連携しながら検討を進めております。

5月下旬には、災害に強い集落の再生に向けたモデル事業を検討するため、災害対策室の担当官が新潟県、長岡市とともに旧山古志村で現地調査を行い、雪解け後の被災状況の確認を行いました。

現地では、地山の大規模な崩落による道路の寸断が各所で確認できました。また、地震と積雪の双方の影響により家屋、倉庫、畜舎など施設の損壊が激しく、まさに集落全体が被災している状況でした。農地・農業用施設については、農地のクラックや畦畔の崩落はいたるところで見られ、中には山腹崩壊により棚田や水路などが山の斜面とともに崩れ、崖状になっている箇所もあるなど、被害の甚大さを目の当たりにしました。

今後は、現地調査の結果を踏まえて、新潟県及び長岡市において、美しい棚田の再生に向けて可能な箇所から農地等の早期復旧に努めていくとともに、集落の再生が必要となっている地域については、被災・未被災地の一体的な整備を通じた土地利用の再編を行うモデル事業の計画づくりを進めていくこととしており、農村振興局では引き続き継続的な支援を実施していくこととしております。

【事務局ニュース】

石井進記念棚田学会賞選考委員会報告

棚田学会賞選考委員会担当理事 千賀裕太郎

第5回棚田学会大会総会にて設置した石井進記念棚田学会賞の「棚田学会賞」受賞者を下記の通り発表いたします。

授賞式は、第7回棚田学会大会の総会でされる予定です。

1. 「棚田学会賞」受賞者

- (1) 特定非営利活動法人 大山千枚田保存会
- (2) 石部棚田保存推進委員会
- (3) 田村善次郎、真島俊一、TEM 研究所

2. 授賞理由

(1) 特定非営利活動法人 大山千枚田保存会
業績名「棚田の保全活動を基軸とした多彩な都市農村交流の実践」

特定非営利活動法人 大山千枚田保存会は、「首都圏に一番近い棚田」をキャッチフレーズに、「棚田オーナー制」「棚田トラスト」「大豆畑トラスト」「酒造りトラスト」など、首都圏の市民に棚田地域との関りの多様な機会を提供することを通して、棚田地域の

総合的な活性化の一翼を担って棚田保全に寄与するとともに、同法人が展開している棚田地域マネジメントのあり方は、他の棚田地域における保全活動に大いに参考になると認められる。

(2)石部棚田保存推進委員会

業績名「荒廃した棚田の復元活動によるグリーンツーリズムの展開」

石部棚田保存推進委員会は、高齢化・過疎化等により耕作放棄が進んだ棚田地域において、棚田を復元して地域の活力を取り戻す目的で地区有志により結成されたが、この組織による懸命な棚田復元活動が引き金となって、地区住民、町、県が一体となった地域活性化事業が積極的に実施されるようになり、農業、加工業、観光業、文化活動、都市農村交流などの展開により町域全体が「まるごとグリーンツーリズム」の拠点として活力を取り戻しつつある。このように、すでに耕作放棄が進んだ小さな棚田地域であっても、地域住民の決意と熱意によって、美しい棚田景観の復元と地域活性化が可能であることを示し、全国における棚田保全の活動に大きな勇気を与えている。

(3)田村善次郎・TEM研究所

業績名「棚田造成に至る『棚田の謎』解明による棚田の文化的価値のアピール」

田村善次郎氏・TEM 研究所は、日本を代表する文化的景観である棚田の成り立ちを長年にわたる社会調査活動から究明し、この成果をもとに建築工学的、農業土木学的技巧を駆使して棚田造成に集積された労働の数量化を試み、さらに棚田の成り立ちをビジュアル化して絵図に展開して、これらの成果を『棚田の謎』という書籍に集成し出版した(2003年、農山漁村文化協会刊)。こうした一連の業績は、棚田の文化的価値を新たな視角からアピールして棚田に関する国民の理解を深め、棚田保全の機運を盛り上げることに顕著な功績を挙げたと認められる。

平成 17 年度棚田学会大会について

今年、総会后、棚田学会賞授賞式を行い、受賞者より、10分程度の活動報告を頂きます。また、シンポジウムでは昨年を引き続き、海外の方をお招きして、アジアの棚田を考察しようと考えます。ぜひ、ご出席下さい。

日程) 8月7日(日)

場所) 三越劇場(東京日本橋三越本店6階)

◆平成17年度棚田学会総会 11:00~12:00

◆棚田学会賞授賞式 12:45~13:50

◆シンポジウム

「棚田からアジアが見えるⅡ」14:00~

(要予約・入場無料/一般は資料代1000円)

◇基調講演 1

「バリ島の棚田と灌漑組織スバックの現況」

イ・グデ・ピタナ

(インドネシア・バリ・ウダヤナ大学教授)

通訳:三浦恵子(早稲田大学非常勤講師)

◇基調講演 2

「ミャンマーの棚田」

高橋昭雄氏(東京大学東洋文化研究所教授)

◇パネルディスカッション

コーディネーター

春山成子氏(棚田学会理事/東京大学助教授)

パネリスト

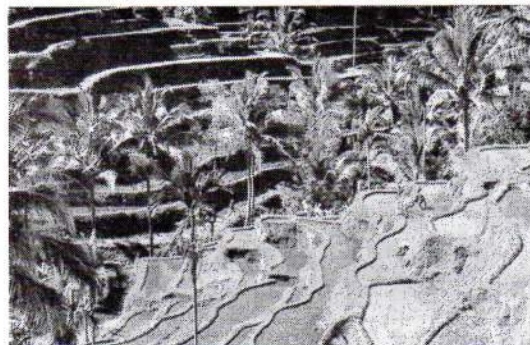
青柳健二氏(写真家)

真勢 徹氏(秋田県立大学短期大学部教授)

海老澤衷氏(棚田学会理事/早稲田大学教授)

◆懇親会 18:00~20:00

不二の間(同7階) 会費:5000円



バリ・テガラランの棚田 撮影:青柳健二

編集後記

昨年日本各地を襲った台風、震災の被害状況を3つの地域からそれぞれ寄せて頂き、改めて被害の大きさを実感しています。一日も早く、災害前の生活に戻られるよう心から祈ります。

今、「愛・地球博」が開催され連日多くの人でにぎわっていますが、愛知県鳳来町で9月2日(金)~3日(土)開催の第11回全国棚田(千枚田)サミット(主催:全国棚田〔千枚田〕連絡協議会)は万博参加事業です。「自然の叡智」をテーマに学会員も万博に多数参加、出展していますので、サミット参加の折にお立寄り下さい。●5/30(月)~9/25(日)『棚田に行こう』会場:瀬戸会場市民パビリオン・問い合わせ:棚田ネットワーク03-5386-4001●8/12(金)~9/1(木)ミュージカル『どんどんどん』会場:長久手会場モリコロメッセ・問い合わせ:ふるさときゃらばん042-381-6721●9/4(日)第1部14:00~第2部17:00~(予定)『天徳の歌合わせ~歌会と雅楽の宴~(仮題)』会場:長久手会場EXPOドーム・問い合わせ:SAPコーポレーション03-5226-7830です。予めお問い合わせしてお出かけ下さい。(高橋)